

THE LABOURS OF HERCULES

アガサ・クリスティー
高橋豊訳

ヘラクレスの冒険



訳者略歴 大正13年生，昭和24年
東京大学文学部卒，英米文学翻訳
家 主訳書「黄金の腕」オルグレ
ン「類猿人ターザン」「ターザン
と失われた帝国」「ターザンの双
生児」バロウズ，（以上早川書房
刊）他多数あり

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel

ヘラクレスの冒険

〈HM①-4〉

昭和五十一年四月二十日 印刷
昭和五十一年四月三十日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 A・クリステイ

訳 者 高 橋 豊

発 行 者 早 川 清

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号 東京・六、四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社 製本・株式会社明光社

ハヤカワ・ミステリ文庫

〈HM①-4〉

ヘラクレスの冒険

アガサ・クリスティー

高橋 豊訳

^m
h

早川書房

384

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1976 Hayakawa Publishing, Inc.

THE LABOURS OF HERCULES

by

Agatha Christie

Copyright © 1947 by

Agatha Christie Limited

Translated by

Yutaka Takahashi

Published 1976 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement
with HUGHES MASSIE LIMITED through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

エドモンド・ヨークへ

その仕事に対し、エルキュール・
ポアロに代り深く感謝し、慎しん
でこの本を献げます。

目次

ことの起こり……………	九
ネメアの谷のライオン……………	一〇
レルネーのヒドラ……………	一五
アルカディアの鹿……………	一七
エルマントスのイノシシ……………	二五
アウゲイアス王の大牛舎……………	二七
ステュムパロスの鳥……………	一八七
クレタ島の雄牛……………	二九
ディオメーデスの馬……………	二六一
ヒッポリュトスの帯……………	二九一
ゲリュオンの牛たち……………	三五

ヘスペリスたちのりんご……………三四五

ケルベロスの捕獲……………三七二

訳者あとがき……………四二

ヘラクレスの冒険

ことの起こり

エルキュール・ポアロのアパートは家具や装飾品がきわめて現代的で、部屋じゅうのクロムがまばゆく光っていた。そこにしつらえられた安楽椅子は、クッションがきいて坐り心地はよかったが、形が角ばり、剛毅でいかめしかった。

それらの椅子の一つに、エルキュール・ポアロはきちんと——椅子のまん中に——腰かけていた。かれと向き合ってもう一つの椅子に、万霊会オールソールズの会員バートン博士が坐って、ポアロのもてなしのシャトー・モートン・ロスタイルドを味わいながらすっていた。バートン博士はきちんとしたところがまるつきりなかった。でっぷり肥ったしまりのない体、白い蓬髪の下に赤らんだ、まのびした顔がある。咳こむような長ったらしい笑い声。しかもかれは、自分自身や周囲のあらゆるものをタバコの灰だらけにする癖があつて、ポアロがかれの周りを灰皿でとり囲むようにしても追いつかなかった。

バートン博士が質問した。

「ところで、エルキュール——つまりヘラクレスとは、どういうわけかね」

「ああ、ぼくのクリスチャン・ネームのことか」

「クリスチャン・ネームなんてものじゃないよ」と、博士は切り返した。「まさしく異教徒の名前だ。しかし、とにかくそれはどういうわけなのか知りたいね。父親の気まぐれなの？ 母親の好みの？ それとも何か家系的な理由から？ もしわしの記憶にまちがいがなければ——ま、わしの記憶はあまり信頼がおけないけれども——きみはアキレスという名の兄弟もいたそうだね」

ポアロはアシル・ポアロの経歴を細部にわたって思い起こしてみた。それははたして事実だったのだろうか。

「そう、ほんの短い期間だけだがね」と答えた。

バートン博士はアシル・ポアロに関する話題を巧みにそらして、

「子供に名前をつけるときにはもっと慎重でなきゃいかんよ」と戒めた。「じつは、わしは何人かの子供の名づけ親になった経験があるので、その点大いに反省させられたのだが、その中の一人にブランシュ（白）と名づけたら、ジプシーみたいに黒くなりやがった！ それから、悲恋の伝説の女主人公にちなんでデアドリと名づけてやったら、底抜けに陽気な女になってしまったこともある。ペイシャンズ（忍耐）という名前にした女の子は、まるっきり気短かで、むしろインペイシャンズという名がふさわしいかったり、それからダイアナ——こいつはいま十五歳になったばかりなのに、体重が百六十ポンドもあるんだから——」古典語学の老学者は身ぶるいして、

「いやはや、あれがダイアナとはね！ 末が思いやられるよ。彼女の両親の図体から推して、そうなることはわかっていたのだ。彼女のおばあさんだってそうなんだから！ わしはマーサとかドルカスとか、何か無難な名前にしようと思って、さんざん努力したんだが、頑として聞きいれないんだ。まったくばかだね、親ってのは」

かれは咳こむようにして笑い出した——小さな顔がしわだらけになった。

ポアロはさぐるような目でかれを見つめた。

博士はいった。「じつはいま、ある光景が思い浮かんだのだ。きみのおふくろと、亡くなったホームズ夫人が編物をしながら話をしている光景だよ。『うちはアシルとエルキュール、お宅はシャーロックにマイクロフト——』」

ポアロは面白がっている友人とは逆に、ややしらけた気分になって、

「あんたのいわんとすることは、要するにぼくの外觀がヘラクレスに似ていないということなんだろ」

バートン博士は、ぱりっとした縞のズボンに黒の上着を着てしゃれたネクタイを締め、寸分の隙もなく服装の整った小柄なアポロの、エナメル靴の先から卵型の頭や上唇を飾っている大きな口ひげに、すばやく視線を走らせた。

「いやいや、とんでもない！」と、バートン博士はいった。「どうやらきみは古典語の勉強を怠けていたらしいな」

「それはそうだ」

「気の毒に。きみは大変な損をしているのだよ。あえていうならば、すべての人に古典語を勉強させる必要があるのだ」

「そうかね。ぼくはそんなものを知らなくてもりっぱに暮してこれたけどね」

「暮してきた？ いや、これは暮しの問題じゃないよ。とんでもない誤解だ。古典語はいまはやりの通信講座みたいな、立身出世の道につながるはしごじゃない！ そもそも人間にとって重要なのは、働く時間ではなくて暇な時間なのだよ。そのところをわれわれはみんなまちがえている。きみ自身を例にとってみよう。きみは毎日あくせく暮しながら、仕事から解放されてのんび

りしたいと思っている——ところが、きみは暇な時間をどうするつもりなの？」

ポアロはその答えを用意してあった。

「ナタウリの栽培に精を出すつもりさ」

バードン博士はあっけにとられて、

「ナタウリ？ 何だい、それは。例のぶかぶかした緑色のかいやつかい——水っぽい味のする」

「そう。しかし、そこが最大の眼目なんだがね」ポアロは急に熱気のこもった口調になっていた。「つまり、ナタウリの水っぽい味を消そうというわけさ」

「ああ、わかった——チーズか、タマネギのみじん切りか、ホワイト・ソースをふりかけるわけだ」

「いやいや——あんたはまるっきり見当違いをしないとよ。ナタウリの風味そのものを改良しようというのが、ぼくの狙いなんだ——」ポアロは目玉をくるっと回していった。「すばらしい香りのするやつをね」

「でも、ボルドー・ワイン並みとはいくまい」バードン博士は香りという言葉でわきにあるワインのグラスを思い出し、一口すすって満足そうにならずいた。「うむ、これはすばらしいワインだ。香りといい、味といい、満点だ。しかしそのナタウリの話は、まさか本気じゃないだろうな」と、心配そうに訊き直した。「好きな恰好に腰を曲げて、すきで土を掘ってびっしょり濡れた羊毛みたいなこやしをやったり——」

「ほう、あんたはナタウリの栽培になかなか詳しいようだね」

「田舎にいたとき、農家の者たちのやるのを見ただけさ。とにかくひどい趣味だね、そいつは！」

それに比べれば——」博士は感慨深げに声を低めた——「書物のずらりと並んだ、天井の低い、長い部屋で——真つ四角な部屋じゃなくて、長い部屋でないといけないよ——そして暖炉に薪があかあかと燃えていて、その前に安楽椅子が一つある。周りを書物に取り囲まれ、ワインを注いだグラスがテーブルの上にあつて、きみは一冊の本を手に開いている。時のたつのも忘れて読みふける——」博士はギリシャの詩の英訳を朗々と引用した。

暗いワイン色の海原で水先案内人はひるまずふたたび身を起こす。

船は風に駆られて矢のごとく走る。

「もちろん、原詩の真髓をほんとうに読みとることはできないだろうがね」

博士はしばらく感慨にふけて、ポアロのことを忘れかけたかのようにあつた。ポアロはかれを見つめながら急に疑惑を感じた——悔恨に似た不安な思いに駆られた。何かかれが見落としたものがそこにあるのではなからうか？ たとえば心の豊かさのようなものが？ そう思うと、悲しかった。そうだ、やはり古典語をすっかり習得しておくべきだった。ずっと昔に。もういまでは遅すぎる……

バートン博士はかれの憂愁を遮っていった。

「きみはほんとうに引退しようと思っているのかい」

「そう」

博士は笑った。「それはだめだよ」

「どうして？」

「引退できるわけがないよ。きみは自分の仕事にあまりにも興味を持っているからね」

「いや、ほんとうにその準備を進めているのだ。あと四、五件だけ——それも依頼されたものの中から気に入った問題だけを選んで、それが解決したら引退する予定でね」

博士はにやりと口元をゆがめて、

「そこだよ。そんなふうになるものなのさ。あと一つか二つだけ、もう一つだけといった調子で、ずるずる長びいてしまう。きみの仕事にはプリマドンナの告別公演なんかあり得ないのだよ、ポアロ！」

博士は笑い、あいそがいい白髪の小人のような体を起こしてゆっくり立ちあがった。

「きみの仕事はヘラクレスの難業ではない。愛の難業なのだ。わしのいうことが正しいかどうかはいずれわかるだろう。十二カ月たっても、きみはまだここににいるだろうし、ナタウリは——かれは身ぶるいした——」依然としてただのナタウリであることに変わりはないだろう」

バートン博士はポアロに別れを告げて、正方形の部屋を出て行った。

こうしてかれはこのページから立ち去ったまま、二度ともどってこない。したがって、わたしたちと関係のあるのは、かれが後に残したもの——あるアイデア——だけなのである。

かれが去った後、エルキュール・ポアロは夢遊病者のようにふたたびゆっくり腰をおろして、ぼんやりつぶやいた。

「ヘラクレスの難業か……、なるほど、たしかに一つのアイデアだぞ……」

翌日、皮製本の大きな本を読みふけているエルキュール・ポアロの姿がそこにあった。ときどきかれはタイプされたさまざまな書類やほかのずっと薄っぺらな本のページに、いらだたしげな視線を投げる。

かれの秘書のミス・レモンは、ヘラクレスに関する情報を集めてかれに提出するように命じられていた。

ミス・レモンはべつに関心も示さず（彼女は詮索好きな女ではないのだ）、しかし、てきばきとその任務を完遂した。

こうしてポアロは、死後神々の部類に入れられ、神聖な栄誉を与えられた英雄ヘラクレスに特に関係の深い古典の伝承説話の謎めいた海の中へまっさかさまに投げ込まれたのだった。

そこまでは順調にいったのだが、しかしそれから先が容易でなかった。かれはおよそ二時間ぶっ通しで、ミス・レモンのタイプした書類やほかの参考文献を調べたり、眉をしかめて要点を書きとめたりしながら、熱心に読みつづけた。それからやがてかれは、椅子の中へ深々と体を沈めて首をふった。昨日のかれの意気込みはすっかり消し飛んで、もはやそれ以上読む気力さえもなかった。どいつもこいつもまったくあきれたやつらだ！

たとえばこのヘラクレスという男——こいつが英雄だと？　こんな英雄があつてたまるもんか！　腕つぶしが太いだけで、知能の低い、しかも犯罪癖をもったごろつきじゃないか！　ポアロは一八九五年にリヨンで公判に付されたアドルフ・デュランという屠殺人を思い出した——牛みたいにはか力の強い男で、数人の子供を殺したのだった。被告側は癲癇の発作によるものだと主張した——その病歴のあることは事実だった——そこで、重^{グランド・マール}症であるのか軽^{プチ・マール}症であるのかという問題をめぐって数日間論争がたたかわされた。この古代人ヘラクレスはたぶん重^{グランド・マール}症の癲癇持ちだったのだろう。ひどい話だ——ポアロは首をふった。たとえそれが古代ギリシャの英雄というものであったとしても、現代の尺度によって測れば、そんなものが通用するわけがない。こうした古典的な理想像はすべてかれの度肝を抜くようなものばかりだった。神も女神も——か